

第 52 回文化講座

発掘調査速報 2012 その 1

【日時】 7月 21 日（土） 13：30～15：35

【会場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター

第52回文化講座「発掘調査速報 2012 その1」

平成24年7月21日（土）13時30分～15時35分

あいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 崎濱 文秀

基地内文化財分布調査 大堀 皓平 … 1

海軍病院建設予定地内発掘調査（普天間古集落） 金城 貴子 … 6

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 休憩 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

首里城跡発掘調査 瀬戸 哲也 … 9

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 質疑応答 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

基地内文化財分布調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 専門員 大堀 翠平

1 基地内文化財分布調査のあらまし

基地内文化財分布調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財（＝遺跡）の範囲や性格の把握、遺跡分布地図等の文化財保護のための基礎となる資料を作成することを目的として、平成9年度から文化庁の国庫補助事業としてスタートした。平成11年度からは返還決定によって特に緊急性が高い普天間飛行場内の調査を行うことになり、さらに平成13年度からは宜野湾市教育委員会と、分担して調査を行うようになった。平成20年度には重要施設や滑走路などの調査不可能エリアを除いた普天間飛行場内の約3～4割の面積について試掘調査をほぼ完了し、翌21年度にはそれまでの調査成果をまとめた『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』を刊行した。その後は試掘調査の成果をもとに確認調査の段階に入り、大山加良当原（おおやまかららーばる）第四遺跡の確認調査を開始して今日に至る。

一方、この調査は稼働中の基地の中で行うことから制約も多く、特に平成21年度からは立入の手続きが難航するようになっている。また広大な面積にある100を超える遺跡の調査・整理作業に対応するための調査体制の確保など、課題も多い。このように成果と課題を抱えつつ、平成24年度で15年目を迎えている。

2 これまでの大山加良当原第四遺跡の確認調査

大山加良当原第四遺跡は、平成19年度に当センターの試掘調査によって発見された遺跡である（図1）。この遺跡は1945年米軍撮影の航空写真から畠が広がる工作地帯であることが分かる（図2）。試掘調査によって、1層：表土層、2層：戦後の造成土層、3層：近世・近代の耕作土層、4層：縄文時代の層の4つの時期の土層が確認された。特に4層は宜野湾市教育委員会が調査を行っている上原瀧原（うえはらぬーりばる）遺跡でも見られる（図1）。この遺跡からは縄文時代晩期相当期の畝間状遺構が検出されており、この時期における農耕（畑作）の可能性を示唆する重要な遺跡である（宜野湾市教育委員会1995）。従って大山加良当原第四遺跡においても、縄文時代の層から同様の遺構が検出される可能性が考慮される。

確認調査では5つのトレチを設定しているが（図3）、平成20年度からの調査によつて、表面踏査では1トレチ付近で畝間状遺構を伴う古い耕作跡が見つかっている。また2トレチ西側の確認調査では上層よりグスク時代～近代の溝状遺構、下層からは縄文土器を含む堆積層が確認されている。3トレチでも上層から近世・近代の溝状遺構が検出されている。また調査に先立ち、調査区一帯の詳細測量や、米軍の要請により天然記念物や希少種の生息確認のための環境調査も行っている。

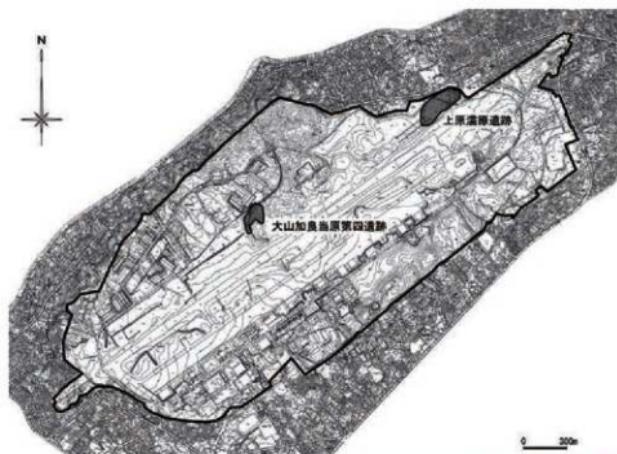


図1
大山加良当原第四遺跡と上原瀧原遺跡の位置関係



図2
1945年の宜野湾市大山とその周辺
(宜野湾市教育委員会)

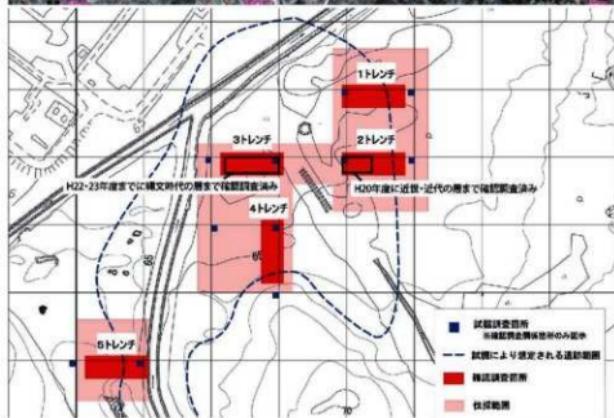


図3
大山加良当原遺跡
トレーニング設定図

3 平成 23 年度の調査成果

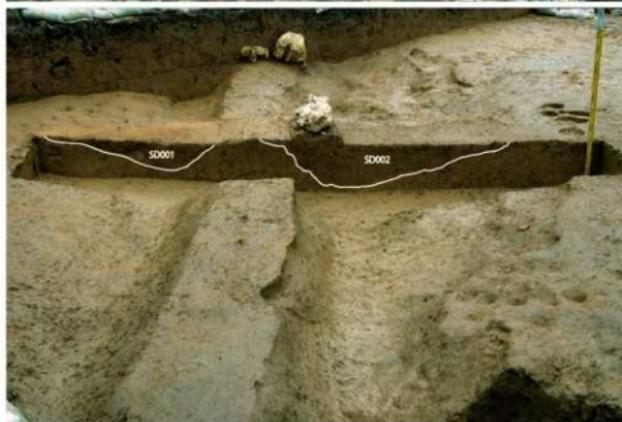
平成 23 年度も前年度までに引き続き、大山加良当原第四遺跡 3 トレンチの調査を行った。近世・近代の層ではいくつかの遺構を確認することができた。溝状遺構（SD001・002）は平成 22 年度にすでに検出されている遺構であるが（写真 1）、これを完掘すると、東側の SD001 は規模が小さく遺物も出土しなかった。これに対して西側の SD002 は規模が SD001 より大きく、遺構覆土の表面と底面から近代頃の陶器類が出土するなどの違いがみられた（写真 2）。また溝状遺構周辺には柱穴とみられるピット 3 口と焼土面 4 箇所が検出されている。また、溝状遺構からやや離れたところからは、壊れた陶磁器がまとまって埋められた土坑（P001）が検出された（写真 3）。陶磁器の破片は接合すると数個体に復元できたが、1 点も完全に復元できたものではなく、おそらく陶磁器を廃棄した土坑とみられる。遺構外からも遺物は出土している。その多くは近世・近代頃の陶器類だが、それに混じってキセルの破片や男性用の副簪、遊具とされる円盤状製品などが得られており、往時の暮らしぶりを窺わせる。

一方、縄文時代の層からは上原瀧原遺跡のような遺構は検出されなかった。しかし層中からは縄文土器と石器が少量ながら出土した。縄文土器は縄文時代後期の伊波式・大山式と縄文時代晩期末の仲原式とみられる 3 つの型式であった。そのうちの過半数を占めるのは伊波式で、文様が残る破片はなく劣化が進み状態も悪いが、3 トレンチ南東側の一箇所でまとめて出土しており、もとは数個体の土器が碎けたと考えられる（写真 4）。大山式も数点だが近い場所で出土している。仲原式は 3 トレンチの北東側で 1 点のみ出土した。近辺からは磨製石斧の刃部片も出土しており（写真 5）、両者の関係性が窺われる。

平成 23 年度の調査によって縄文時代の層の途中まで調査を進めることができたが（写真 1・7）、未だ岩盤までには達しておらず、遺跡の確認を完全に達することはできなかつた。さらに下の層に遺構・遺物があるかどうかを調査するとともに、残り 4 箇所のトレンチの発掘調査は平成 24 年度に持ち越された。

参考文献

- 宜野湾市教育委員会 1995 『上原瀧原遺跡発掘調査記録—普天間飛行場基地内陸軍送油管新設工事に係る緊急発掘調査一』 宜野湾市文化財保護資料第 43 集
宜野湾市教育委員会 2012 『大山前門原第一遺跡—平成 21・22 年度個人住宅建設に係る第 2 次～第 4 次緊急発掘調査一』 宜野湾市文化財調査報告書 第 49 集



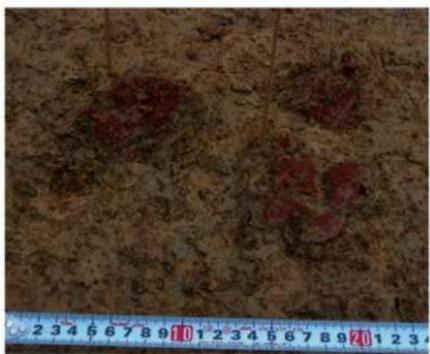


写真 4 縄文土器（伊波式）出土状況



写真 7 大山加良当原第四遺跡 3 トレンチ
土層の堆積（平成 23 年度東壁）



写真 5 磨製石斧出土状況



写真 6 平成 23 年度完掘状況

海軍病院建設予定地内発掘調査（普天間古集落遺跡）

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 専門員 金城 貴子

1 調査期間：2011（平成23）年8月1日～2012（平成24）年3月14日

2 検出遺構

- 近世～近代：ピット、土坑、溝跡、方形石組遺構、井戸跡、炉跡など
- グスク時代：ピット（建物プランを確認できるものを含む）
- 縄文時代：土坑（深さ1m以上）

3 出土遺物

- 近世～近代：陶磁器類（沖縄産・中国産・本土産）、金属製品、ガラス製品など
- グスク時代：滑石製石鍋、カムィヤキ、土器など
- 縄文時代：石器、土器など

4 時代別の概要

- 近世～近代：本遺跡の中心となる時期であり、遺構・遺物ともに最も多く確認されている。中でも、屋敷を囲うように検出された溝が注目される他、ピットや土坑には建物プランを組めそうなものもみられる。見つかった種多様な遺構からは、戦前まであった旧集落の様相がうかがえる。
- グスク時代：遺構はピット、土坑などがあり、建物跡と想定されるものもある。遺物は中国産陶磁器・土器などが出土するが、量的には最も少ない。
- 縄文時代：遺構は土坑などが検出されており、遺物は石器・土器などが出土する。



調査箇所図



写真1 遺構完掘状況



写真2 方形状にめぐる溝（近世～近代）



写真3 方形石組遺構（近世～近代）



写真4 井戸の半裁状況（近世～近代）



写真6 土坑（縄文時代）



写真5 掘立柱建物跡（グスク時代）

首里城跡「銭蔵東地区・御内原東地区・淑順門東地区」の発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班主任 瀬戸 哲也

場所：那覇市首里当蔵 3 丁目 1 番（国営沖縄記念公園首里城地区）

目的：首里城復元整備に伴う遺構確認調査

期間：平成 23（2011）年 7 月 1 日～平成 24（2012）年 3 月 27 日

面積：825m²（銭蔵東地区…250m² 御内原東地区…325m² 淑順門東地区…250m²）

時代：15 世紀～20 世紀（グスク時代～近代）

1. はじめに

首里城跡発掘調査は、18 世紀ごろから戦前まであった姿を復元する情報を得るために、昭和 59 年度から継続して沖縄県教育委員会（現在は、当センター）が行っています。

平成 23 年度は、銭蔵東地区、御内原東地区、淑順門東地区的 3ヶ所において実施しており、各地区の調査成果を説明していきます。

2. 銭蔵東地区的調査成果

首里城の北東部にあたり、「銭蔵」と呼ばれる泡盛を保管していた建物があった場所の東側となっております。

（1）戦前まであった城壁

銭蔵と区切る南北方向の城壁の基礎部分を確認しました。この城壁は、切石を使っており、下方は布積み（長方形の石を横に積む）、上方は相方積み（多角形の石を重ねて積む）と 2 通りの積み方がなされているので、積み替えがあった可能性があります。

この城壁は、戦前の測量図にも載っているもので、最初に造られた時期は 17 世紀ごろと考えられます。またこの下の地層には、地割れの跡が見られ、その原因は地震や大雨などの今は今のところ特定できません。ただ、この地層はクチャという脆い泥岩であり、崩れやすい場所であったことは確かで、城壁の積み替えもそのためと思われます。

（2）16～17 世紀の石積

この城壁に埋もれる石積も確認されており、16～17 世紀にあったものと考えられます。この石積みは城壁と異なり、自然の石をそのまま積んだ野面積みのもので、あまり頑丈なものとは考えにくいです。また、この石積を埋めた土は、地山であるマージを利用した明褐色土と、瓦や埴（レンガのようなもの）や陶磁器・獸魚骨・貝など城内のゴミと思われるものを大量に含んだ暗褐色土が相互に斜め方向で堆積しているところから、一度に人の手によって埋めたものと考えられます。

この土から出土した瓦は、牡丹などの花が描かれたもので特徴が似通っており、那覇市県庁付近にあった湧田窯で比較的短期間で焼かれたものと考えられます。

(3) 15世紀後半～16世紀の貝だまり

この石積の下層には、炭を多く含んだ黒褐色土があり、多くの貝類・獸魚骨が集中して出土しております。陶磁器はそれほど多くありませんが、15世紀後半～16世紀のもので、石積より古いものが多いようです。このうち貝類は、ヤコウガイやサラサバティなど、螺鈿をとるために利用する貝が割れた形で多く見られることから、城内のどこかで螺鈿製品が作られていた可能性も指摘できます。

この貝だまりの下層には、15世紀前半頃の造成土が確認されており、この地区の造成がこの時期から始まったものと考えられます。

3. 御内原東地区の調査成果

正殿の裏側にあたり、近世には女性が主役の場とされた「御内原」の東側にあたります。

(1) 戦前まであった城壁

正殿の南東側にあった王の私室である二階殿に伸びる城壁の基礎部分を確認できました。この城壁も戦前まであったものですが、城壁の下層を掘ると、16～17世紀の土層の上に築かれていたことが分かりました。また、この城壁に埋もれた石積があり、15世紀と考えられる炭が多く入った土層にも埋もれており、より古い石積があったことが分かりました。

(2) トイレの可能性がある「落ち込み」

興味深い遺構としては、幅0.8m、長さ1.5m、深さ1.5mの岩盤を掘り込んだ落ち込みが見られ、この上端に幅10cm、長さ20cm、深さ20cmの長方形の溝状に刻まれているものがあります。この溝状の刻みは、昔沖縄にあった「フル」というトイレの便槽の端に似ています。この遺構は、先述の城壁によって埋められており、ほぼ同時期の17世紀には埋められたものと思われます。今後、土の分析など更なる検討が必要ですが、御内原と言われた場所の隅にあることから、もしかしたら女官たちのトイレであったかもしれません。

4. 淑順門東地区の調査成果

御内原に入る「淑順門」の東側の城壁周辺を調査しました。

(1) 戦前まであった城壁

淑順門へ続く内郭の城壁に当たり、その基礎部分とそれを支える裏込め部分を確認し、城壁の幅が5mあることが分かりました。また、この城壁の裏込めは全て50cm以下の自然のままの石灰岩を使っており、土を使わずに城壁を作ったこともわかります。また、この裏込めの中には、やや不整形ですが列状に確認できるものもあり、適當に入れたのではなく一定の決まりがあった可能性が考えられます。

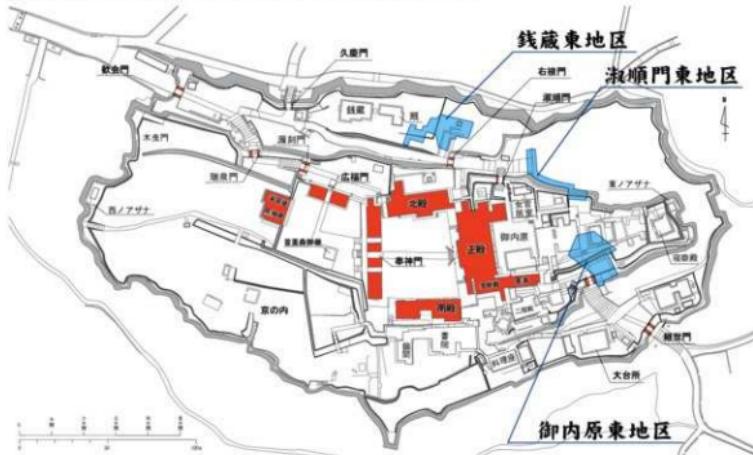
(2) 入口を設けた石積

この城壁と直交する幅1mの小規模な石積も確認されており、2m程度途切れている部分があり、淑順門と東側を区切る入り口であったものと思われます。この石積は15世紀頃の炭が多く入った土層の上に築かれており、19世紀後半までには埋まつたことが出土遺物により分かりました。また、15世紀頃の火を受けたと思われる地面も確認しています。

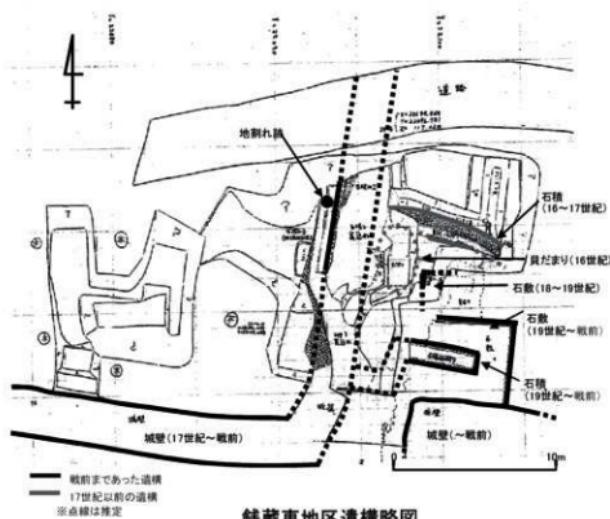
5. おわりに

今回、3つの地区で発掘調査を行いましたが、特に銭蔵東地区で15世紀後半～17世紀にかけて大量の獣魚骨・貝・瓦・陶磁器の破片などが多く出土したことが注目されます。

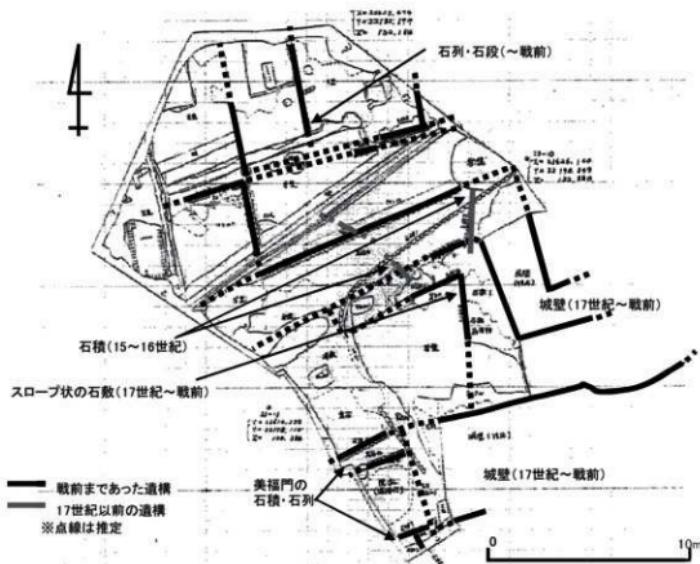
このことは、正殿や御内原など多くの建物があった内郭から、この銭蔵東地区を含む外郭一帯に、食べかすである獣魚骨・貝、使えなくなった陶磁器・瓦などを捨てた、つまりゴミ捨て場として利用されていたものと考えられます。



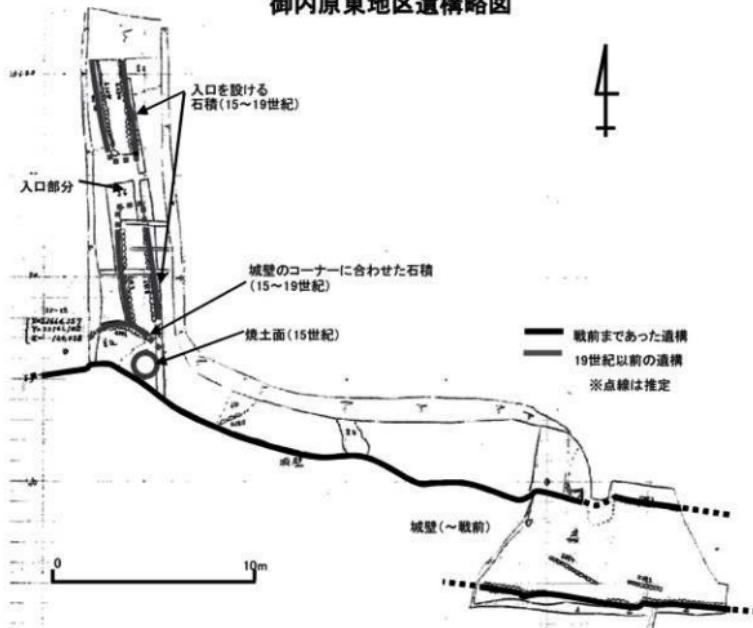
首里城平面図（平成23年度調査地区）



銭蔵東地区遺構略図



御内原東地区遺構略図



淑順門東地区遺構略図

行事予定のご案内

文化講座

入場無料・定員 140 名 会場：当センター研修室

第 53 回文化講座 発掘調査速報 2012 その 2

平成 24 年 8 月 18 日（土）13:30～16:05（13:00 開場）

- ① 宮国元島上方古墓群発掘調査（宮古島市）
- ② 県内遺跡詳細分布調査（座間味村・渡嘉敷村）
- ③ 中城御殿跡発掘調査（那覇市）
- ④ 戦争遺跡詳細確認調査（県内各地）

第 54 回文化講座 首里城京の内出土品展関連講座

平成 25 年 1 月 26 日（土）

講師：金沢 陽（出光美術館）

小林 仁（大阪市立東洋陶磁美術館）

新垣 力（当センター）

おきなわ県民力レッジ連携講座

「グスクのはなし（仮）」

平成 24 年 11 月 10 日（土）13:00～

講師：當眞 嗣一（元沖縄県立博物館館長）

企画展

重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

平成 24 年 11 月 3 日（土）～25 年 5 月 5 日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉球大学附属病院横）

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

●開所時間 午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●休 所 日 毎週月曜日、国民の休日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始（12月 28 日～1月 4 日）、慰靈の日（6月 23 日）

※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所